

金剛寶戒寺便



令和八年九月一日発行 第一五十五号

檀信徒の皆様、こんにちは。七月二十八日十六時三十分頃に熊本地震が発生いたしました。私はちょうど境内で草刈りをしている最中でした。スマートフォンのアラートが鳴り、数秒後に地面が波打つように揺れました。

幸い当山やお墓などに被害はありませんでした。作業に追われていたためそのまま草刈りを続けたのですが、県外の友人などからお見舞いの連絡が入っており、被害の大きさを知ったのは作業を終えてからでした。猛暑の中で被災された方々、またお亡くなりになられた方々に心からお見舞いとお悔やみを申し上げます。

気温の上昇により「酷暑日」という言葉も使われるようになり、雨が降らず渇水に悩む地域もあれば、警戒レベルⅢの大雨や、今までに見たことのない軌道を描く台風など、氣候変動が強く懸念されます。私の記憶に最初に残っている大災害は阪神・淡路大震災ですが、震災年表を調べると、日本では震度Ⅴ弱～Ⅵクラスの地震が頻発していることが分かります。平成二十八年の熊本地震からわずか十年での再被災となり、現地の方々の精神的なご負担が強く懸念されます。

当山では二年前に檀信徒会館を建設した際、葬儀などでお檀家様が宿泊できるようトイレやお風呂場を設置いたしました。また昔ながらの薪で炊ける窯を残し、ポータブル発電機も備えているのは、大分で大きな地震が起きた際に、お寺が少しでも対応できるよう考えることです。

熊本の知人のお寺も大きな被害を受けており、小さなお子さんもいるため「お盆前ではあるけれど、可能であれば数日でも避難されませんか」と声を掛けました。しかし、返ってきた返事に言葉を失いました。「盗難被害が多く、家族全員で避難できない人がたくさんいる」というのです。全壊や半壊した家は玄関の傾きで施錠ができないため、誰かが車などに泊まり込んで家を見張らざるを得ない状況なのだそうです。場合によってはエアコンの室外機なども盗まれると言っていました。

「火事場泥棒」という言葉は昔からあり、ニュースでも盗難防止のための警察官派遣が報じられておりますが、約三十年前の阪神・淡路大震災の際には被災されても暴動を起こさず、整然と支援物資を待つ姿が世界から称賛されていたことを誇らしく感じておりました。大きく変わってしまったのは、自然現象ばかりではないように思えてなりません。

お盆参りや盆踊りなども終えた八月二十五日・二十六日の二日間、大分宗務支所と青年教師会の有志が集まり、熊本のお寺へ復旧ポ

ランテシアに向かいました。やはり被害は大きく、少しでも安心してお参りができるように落ちた瓦やガラスの処分、拭き掃除、ゴミの片付けなどを行いました。一見すると大丈夫そうに見える場所も、よく見ると壁や天井、床、地面などが歪んでおり、復旧への見通しが立ちません。まだ手付かずになっていた所もあったため、今回の作業が復旧に向けた「ささやかな一歩」となっていれば幸いです。真言宗には「自他不二（じたふに）」という教えがあります。自分（自）も他者（他）も、すべては大日如来の現れであり、本質的には区別はありません。他者を傷つけることは自分を傷つけることであり、他者を救うことは自らの救いにつながります。他者の悲しみは自分の悲しみでもあるはずです。

この教えが人々に浸透すれば、被災地での心無い行いはもちろん、世界各地で起こっている戦争も終焉を迎えるのではないでしょう。八月十四日の合同供養にて、物故者の追善供養と共にそのようなお話をさせていただきました。

○秋彼岸の合同供養（金剛宝戒寺・本堂）

九月二十三日（水曜日）十三時半から

○法話の会（金剛宝戒寺・檀信徒会館）

十月八日（木曜日）十四時から

○写経の会（当山檀信徒会館・会費千円）

十月十七日（土曜日）十四時から